働かない身体は罪であろうか

――森鷗外「高瀬舟」論――

友田義行

要旨：本稿は森鷗外「高瀬舟」に描かれた自殺の理由に着目し、生産労働を支える身体のコントロールに支障を来した病人が、自らの命を絶つ行為へと駆り立てられるという物語設定を検証するとともに、こうした事象を自然な成り行きと受け止めてきた近代の生命観を問い直すものである。

はじめに

「高瀬舟」は一九一六年一月、『中央公論』（第三一巻第一号）に発表された。梗概は次の通りである。寛政の頃、遠島を申しつけられた罪人は高瀬舟に乗せられて、京都から大阪へと高瀬川を下ることになっていた。ある日、同心・羽田庄兵衛は、弟殺しの罪に問われた喜助という男を、高瀬舟で護送することになる。従来の罪人とは異なり、晴れやかな表情を浮かべていることを不思議に思った庄兵衛は、何を思っているのか喜助に問いかける。喜助は、これまでの境遇に比べれば、金銭まで支給されて島に遣られることはむしろありがたいといった心境を語るのだった。足ることを知る喜助と我が身を引き比べた庄兵衛は、弟殺しに至った経緯を喜助に尋ねる。喜助が語ったのは、病気の弟が自らの喉に剃刀を押し込んだものの死にきれずにおり、本人からの訴えに応えて剃刀を引き抜いてやったところを隣人に目撃された次第であった。庄兵衛はこれが果して弟殺しというものだろうかという疑いを拭えなくなったが、「オオトリテエ」の判断に任すほかないと考えるに至る。

「高瀬舟」は森鷗外の代表的な短編小説の一つであり、一九二三年に中等教材となったのを皮切りに、[1]戦後も一九五五年から各社の中学校および高等学校の国語教科書に掲載されてきた定番教材でもある。近年の教科書でも採択されており、[2]同じ鷗外の「舞姫」ほどの採択頻度ではないものの、多くの読者に受容されている。

「高瀬舟」については近代文学研究と国語教育学を中心に様々な領域において多くの論考が重ねられてきた。では、どのような論点が主流であっただろうか。「高瀬舟」に言及した複数の学問領域における先行研究および指導書を批判的に検討し、教室の内外で「高瀬舟」がどのように読まれてきたかを把握したい。また、小説の原典と比較しながら、「高瀬舟」がどのような言葉の選択と組み立てによって成立しているか、語りによってどのような効果が生じているかを意識した本文分析を通じて、従来から注目されてこなかったテクストの細部に光を当てていきたい。

一　知足と安楽死という二大問題

角谷有一は二〇〇〇年代以前の「高瀬舟」研究史を大きく三つの時期に分けて整理している。[3]中でも特筆されているのが、三好行雄の論考である。[4]三好はまず、鷗外が「高瀬舟」の成立について説明した随筆「附高瀬舟縁起」（以下「縁起」と略記する）を取り上げ、「高瀬舟」が江戸時代の随筆集『翁草』収載の「流人の話」を原典にしていることを論じ、小説と原典を比較することで、ある歴史的事実に対し

て鷗外の感動と興味がどう喚起され、彼の主体的な発想がどう関わったかを読み解こうとした。[5] そして鷗外が「流人の話」から「二つの大きな問題」を引き出したと述べている点に、三好は注目していく。一つは「財産と云ふものの観念」の問題であり、もう一つは「死にかゝつてゐて死なれずに苦しんでいる人を、死なせて遣ると云ふ事」すなわち「ユウタナジイ」の問題である。[6] 前者は「知足」、後者は「安楽死」の問題として理解されてきた。

三好の論の運び方はその後の作品研究にも踏襲され、特に知足と安楽死がこの小説の主題であるという理解は広く共有されてきた。約三十五年後に三好は再び本作を取り上げて、自身の論考も含めた研究史を整理し、前述した二つの主題は分裂しているか否か、分裂しているなら両者のいずれに比重が置かれているか、統一的主題は発見できないかといった論点を提出した。[7] また、この時点で三好は「高瀬舟」論の減少化に触れ、「作品の理解にまぎれがなく、問題がほぼ出尽くしたという印象」をその理由に挙げている。[8]

なぜこれほどまでに「知足」と「安楽死」が「高瀬舟」の解釈を独占してきたのだろうか。たしかに、語りの効果を意識して読むと、これらが主要な問題となる理由はひとまず了解できる。[9] すなわち、庄兵衛に内的焦点化した語りが、知足と安楽死の問題へと読者を誘導するよう巧みに仕組まれているからである。たとえば、「ふしぎなのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである」という地の文の語りは、語り手の解釈が庄兵衛の思考と混じり合うようにして形成され、直接話法で提示された様々なノイズを含む喜助の語りから、要点（主題）を濾過して読者に伝える。無欲と知足の姿勢を喜助から感得した庄兵衛は、それを「ふしぎ」すなわち謎や疑問として捉え、読者にも投げかけることで考察を誘うのである。

また、喜助が「弟殺し」に至る詳細を語ったあと、庄兵衛の感想として示される「それが罪であらうか」という反語的疑問は、喜助に遠島を申しつけた「オオトリテエ」（権威）への批判を暗示するものである。罪一等を減じたとはいえ、喜助に有罪を下した「オオトリテエ」たる「お奉行様」の裁定に対し、読者は庄兵衛と共に批判的な「再審」[10] を求めずにはいられないだろう。

近年の中学校国語指導書では、二つの主題を掲げながらも、それらに囚われることのないよう、「微視的な読解作業に陥ることを避けて、書き手（語り手）や登場人物の考え方や生き方を読み取らせることに重点を置きたい」との教材提出意図も示されている。[11] だが裏を返せば、実際には二つの主題に囚われる傾向が、それだけ強いことが分かる。高等学校の授業でも、二つの主題に引きつけられがちな実態が報告されている。[12] 教師が誘導しなくとも、先ほど確認したように、小説の語り自体が従来の主題へと注目を促す力を持っていることは否めない。

他方、二つの主題を焦点化する際に、作品外の情報として重要な論拠とされたのが、三好らも言及してきた鷗外自身の解題ともいえる「縁起」[13] であった。「縁起」は戦後いち早く本作を載録した教科書[14] でも「高瀬舟」および「流人の話」と併載されており、この形式は近年の一部の教科書でも踏襲されている。「縁起」で明示された作者の意図――「二つの大きな問題」――によって、「高瀬舟」の解釈は明確化されると同時に、狭められてきたと考えられる（「縁起」の具体的内容については後で引用しながら詳述する）。

以上、「高瀬舟」研究史および指導書で定説化されてきた二つの論点を確認した。なお、これらの主題に対し、「高瀬舟」と「縁起」で、庄兵衛と鷗外による評価が下されていることも見落とせない。すなわち、「高瀬舟」では庄兵衛が「毫光」を幻視することで、喜助の慾なき生き方（知足）が強く肯定されており、「それが罪であらうか」という問いが、喜助の行為（「安楽死」させること）を免罪・容認するよう読者に促している。また、「縁起」では鷗外が「従来の道徳は苦しませて置けと命じてゐる」として、延命の発想を前近代的な蒙昧であるかのように印象づけ、「医学社会」なる先端領域においては「これを非とする論がある」と、時流に応じた近代思想として安楽死を肯定的に紹介しているのである。

しかし、庄兵衛が喜助に対して畏敬の念を抱き、「弟殺し」をも容認しようとするときにこぼれ落ちるのは、ほかでもない、死んだ弟の生の尊厳ではないだろうか。作中では名前すら明かされない、喜助の弟（以下「弟」と略記する）の生について考察するために、次節では原典からどのような翻案を経て「高瀬舟」が成立したかを分析する。

二　原典との比較

三好行雄は小説「高瀬舟」を原典「流人の話」と比較して次のように述べていた。

こうした原典の記述どおりに小説の筋をすすめながら、しかし鷗外は、時・場所・人名・人間関係などを具体的に設定し作品の形象性をつよめるとともに、いっぽうでは、喜助（囚人）や庄兵衛（同心）の心理を拡大して精細な描写をあたえ、ほりのふかい近代小説をうみだすことに成功している。無機物のように血の気のない「流人の話」の主人公たちが、いきいきとした人間の息吹によみがえるまで――そこには鷗外の卓抜な創作力もあり、見事な短篇技術の精粋もうかがえよう。[15]

原典に具体的な設定を加筆することで、鷗外が江戸時代の随筆を近代的な短編小説に拡大変異させていることの指摘である。では、どのような意図で、どのような要素が加えられたのだろうか。

鷗外の解題「縁起」を鵜呑みにするならば、原典から知足と安楽死の問題を抽出し、拡大したと理解することになる。しかし、鷗外の翻案は二つの主題を鮮明に打ち出す一方で、様々な余剰を生み落とした。本稿が照準するのは、作者が主張する意図やエスプリではなく、むしろ作者が意図した創作に、恐らくは不本意にも付随した問題である。それはあまりに「見事な短篇技術」のせいか、看過され続けてきた論点でもある。

「高瀬舟」で新たに設定された要素の一つに、居住地を転々とする苦難がある。[16]そもそも喜助の名は「住所不定の男」という属性とともに登場する。庄兵衛から声をかけられた喜助は、まず遠島を申しつけられたことで権威を拠り所に定住できることの有り難さを語り、次いで二百文の鳥目を与えられたことへの感謝を語る。ところが、庄兵衛は定住の喜びについては聞き流し、鳥目の件にのみ反応してしまう。身体を置く空間を確保できない漂泊的な暮らしの辛苦にまでは、庄兵衛の想像力は及んでいない。

知足を主題として打ち出したいのであれば、原典と同じく鳥目についての話題を出すだけで済みそうなものである。では漂泊の苦難が加筆されることで何が付加されたか。労働力の再生産のためには定住・帰属できる場所が必要であるにも拘わらず、兄弟はそれすらも奪われていたことである。彼らは貧しかっただけでなく、貧困を撥ねのけるための労働に従事しようにも、その力を再生産する場すら満足に得られない流浪の存在であったことが強調されるのである。西陣織が流通する華やかな京都の足下に、流動する労働者たちが存在した。その一人であった喜助は、仮の住まいから白州の場に連行され、牢で初めて労働から解放されたのち、京都を離れて大阪へ、さらに島へと流れていこうとしている。

喜助が辿る流浪の道程は、労働と移動という問題項を物語の深層で紡ぎ出すのである。[17]そして、労働も移動も困難になった自らの身体を、死へと追い込んでいったのが、ほかでもない彼の「弟」であったのだ。

三　自殺の根本的動機

研究史では「弟」の死は安楽死と結びつけられてきた。「高瀬舟」をめぐる安楽死の議論について確認しつつ、その手前にある自殺の問題について考察を進めたい。

鷗外が安楽死に切実な関心を持っていたことは、三好をはじめ多くの先学が指摘している。[18]軍医の経歴、日清・日露戦争への従軍体験および戦場での重傷病兵への対応、ドイツ語医学論文の安楽死説の抄訳、長女茉莉へのモルヒネ投与未遂などである。こうした経験を前提として、鷗外は「流人の話」に関心を持ち、「高瀬舟」を創作したと見られる。

ただ、「流人の話」は、誰もが安楽死の問題を看取するような内容ではないと思われる。しかも、これを原典とした「高瀬舟」に描かれたのは、典型的な安楽死議論とは一線を画した状況ではないか。この点については竹盛天雄[19]や田中実[20]が早くから指摘しているほか、木村小夜[21]が詳述している。いずれも個人の自己決定権を基礎に置く西洋の安楽死観とは異なる様相が「高瀬舟」に描かれていることを指摘する

点で一致している。

鷗外の安楽死に対する理解はどのようなものだったか。しばしば引用される「縁起」の一節から確認しよう。

こゝに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縦令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。こゝに麻酔薬を与へて善いか悪いかと云ふ疑が生ずるのである。〔中略〕従来の道徳は苦ませて置けと命じてゐる。しかし医学社会には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、楽に死なせて、其苦を救つて遣るが好いと云ふのである。

ここで示されているのは、本人の病苦を見かねて周囲の者が手を下すという、現代でも一般的な安楽死の意味に近いように見える。ところが、小説「高瀬舟」に描かれた状況はこれと異なっており、生命倫理学では「慈悲殺」や「諦めとしての安楽死」といったものであるという指摘がある。(22)

また、「高瀬舟」で語られる事件の経緯は、そもそも安楽死という概念では説明しきれないという指摘もある。例えば木村小夜は、「周囲――むろんこの場合は兄喜助――の苦を見かね、本人が自害しようとする、という、言わば安楽死とは逆の経緯がまずあった」ことを捉え、「「兄きに楽がさせたい」という弟の自殺動機こそ、「縁起」には全く触れられていない、しかし、二つの話を関連づけるための鍵に他ならない」と論じている。(23) そして、知足と安楽死の「二つの話」を次のように統一して見せる。

喜助にしてみれば、自分の生のために弟を死なせたということになるわけである。それでは、こうして遺された喜助にその後、どのような生き方があり得るか。この死を受け止めるためには、即ちこの死を無駄にせぬためには、以後の自分の生がどのようなものになろうともそれを弟が与えてくれたものとして受けとめ、弟が自分に対して「楽がさせたい」と命を賭けて望んでくれた通り、どのような状況下でも満足出来るものとして喜び、生きていく、という覚悟を求められるであろう。(24)

この論考は、三好が提議した知足と安楽死という二大テーマの統合を果たしている点でも重要である。(25) しかし、それでもなお漏れ落ちた問題があるのではないか。

木村は「弟」が喜助に「楽がさせたい」と考えたことを自死の動機と捉えているが、これは自死に至る理由の一部でしかない。改めて「弟」が自死を試みた根本的な契機に立ち戻ると、まず、「弟」は元より自死願望があったわけではない。幼くして両親を喪い、漂泊と貧困の艱難を舐めながらも、兄と二人で働いて糊口を凌いできたのである。だが「去年の秋」（作中現在の半年前）に西陣の織場で空引機に従事するようになってしばらくすると、「弟が病気で働けなくなつた」。喜助は一人で働きに出るようになり、「弟」は「わたくし（論者注：喜助）を一人で稼がせては済まない済まないと申して」いたところ、「どうせなほりさうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思」い、喉笛を切るに至ったのだという。

「弟」が「済まない」と謝る罪の内実は何か。端的に言えば、働けなくなったことである。労働によって自らが生きていくだけの金銭を得られなくなり、その分まで兄に稼がせることに罪悪感や恥辱を覚え、迷惑をかけないよう（兄を救うべく）自死に向かったのだ。共に働いて生きてきただけに、働けなくなったことで、「弟」は立つ瀬がない心境に自らを追い込んでしまった。

では、「弟」が働けなくなったのはなぜか。病気になって身体が思うように働かなくなった（機能しなくなった）からである。(26) たとえ労働意欲はあっても、身体的な理由で働けなくなったのだ。身体が思う通りに働かなくなり、その結果として労働することもできなくなった状況を、「働かない身体」と呼びたい。(27)

本稿が問い直したいのは、働けないことは生きる価値を失うほどの罪なのかということである。喜助の行為が有罪（殺人）か否か――安楽死の是非――を問う前に、自らに死罪を科した「弟」の判断を問い直したいのだ。病のため働かない身体に

なった、「それが罪であらうか」と。「高瀬舟」は安楽死の背後に、労働と自殺の問題を書き込んでしまったのである。

四　自明化された道徳を問い直す

「高瀬舟」に描かれているのは、自殺未遂の事例である。そして自殺の根本的な動機として、働かない身体と、肉親に迷惑をかける罪悪感や恥辱の問題があったことを確認した。だが、こうした設定に違和感を提示する論考は管見の限り見当たらない。知足と安楽死に関心が集中したこともあるだろうが、単に論点が些末で誰も関心を持たなかった恐れもある。本稿の主張が持つ意義と、看過されてきたことの理由を、いくつかの先行研究および思索を辿りながら述べたい。この迂回を通じて、鷗外が「高瀬舟」に残した問題点に加え、教材として本作を用いる際の留意点も見えてくるはずだ。

丹羽光威は「高瀬舟」の指導書で、「自然」という概念を用いている。[28]「人の情として、弟の苦痛を見るに見かねて弟の催促通りに、かみそりを抜いて安楽死させてやるのも、普通の人間として自然な姿」であり、「ここには、鷗外のなしえなかった自然な人間的な姿へのあこがれが見てとれる」という。「弟」の自死までが「自然」であるとは明言していないが、多くの読者にとって「弟」の自殺の動機も「自然」なものと受容されてきたのではないだろうか。

ある事柄を「自然」（自明）と見なし、問題として措定することが困難な領域を考察する際に、戸坂潤の思索が有効である。

> 社会に於ける習慣、或ひは又習俗は、社会の生産機構に基く処の人間の労働生活の様々な様式関係によつて、終局的に決定されてゐるが、二次的にはこの生産関係を云ひ表はす社会的秩序としての政治・法政が維持発展させる処のものであり、そして三次的には社会意識や道徳律が観念的に保証する処のものだ。その際習俗は、云はゞ歴史的な自然性（意図的でも人工的でもないといふわけで）を持つたひとつの与へられた社会的制度であると共に、同時にその制度が概略の大衆の意識にとつて安易快適（アット・ホーム）であるといふ場合のことだ。処でこの云はば制度と制度習得感としての習俗が、一見片々たる細々した手廻り品や言葉身振りにまで細分されて捉へられた場合が、恐らく風俗といふものだらう。[29]

喜助の「弟」の自死動機を看過する「習慣」を持った読者は、働かない身体を抹殺するよう誰かから強制・推奨されたわけではない。しかし、それは決して社会の生産機構や政治・法政といった人工的な産物とは無関係の「自然」なものではなく、むしろ多くの大衆の意識にとって「安易快適」感を伴うほどになじんだ「社会的制度」でもあることに、戸坂は気づかせてくれる。

自明化された制度修得感を問題化したと思われる先行論の例として、高野美保は、庄兵衛が自分の判断にしようとした「オオトリテエ」が、「「お奉行様」を通じて世間に適用される〈通例〉」のことであると指摘している。[30]大衆にとって「自然」な「〈通例〉」こそが、思考の対象にすらしづらい「社会的制度」という「オオトリテエ」なのである。

鷗外は「縁起」で、安楽死否定論を「従来の道徳」と一蹴したが、一方で、「弟」の自殺動機については同じ「従来の道徳」すなわち「オオトリテエ」に基づいて無批判に創作してしまったことになるのではないか。

ただ、戸坂の思索を支えにして「高瀬舟」を精読するならば、このテクストには一見無理のない自殺理由が設定されている一方で、それに反する思考を誘発するような要素も含んでいることに気付かされる。次節では「弟」の自殺動機について考察を進めつつ、彼の生の尊厳にまつわる本文箇所を検討する。

五　働かない身体の生

働かない身体となった恥辱、兄に迷惑をかける罪悪感、兄を楽にしたい願望――こうした「弟」の自殺動機は、原典「流人の話」には見当たらない。原典ではそもそも「病」への言及自体が無い。しかし、「高瀬舟」では病によって働かなくなっ

た身体と罪悪感や恥辱の感情が自殺の動機として設定されている。この改変については鷗外も「縁起」で解説していない。それは作中現在（江戸時代）でも、小説執筆時（大正時代）でも、そして現代においてもなお、特に説明の必要もない「自然」な設定なのだろう。

こうした動機に言及した数少ない論考である田中実や木村小夜の先行論は、弟の「犠牲」によって兄が生かされ、その結果「知足」の境地に達するという理解をおおむね共有している。[31] また、喜助の行為についても、「弟への献身的行為」[32]と捉える論がある。兄弟は互いに「犠牲」と「献身」の気持ちから行動していたという解釈が成立する。

「犠牲」「献身」という麗句で弟の行為を捉えるならば、この小説は兄弟愛の物語に昇華されるだろう。ところが、この犠牲者は結果として兄を殺人の罪に陥れているし、貴重なはずの蒲団も借家も流血に染めてしまっている。作品自体が単純に家族愛の賛美として読まれることを拒絶しているようにも見え、むしろ献身であったはずの自殺が残された者に落とす暗い影に目が行く。なぜそれでも働かない身体は死へと追い込まれなければならないのだろう。

今村仁司は近代特有の労働観を論じる中で、「労働が人間であることにとって本質的であるという考えは、とくにフランス革命以後にますます定着していき、ついには自明の事実として扱われる」と述べている。[33] 前近代の「流人の話」には、労働からの脱落が人間存在に深く関わるような問題は描かれていなかった。だが「高瀬舟」には働かない身体を自ら罰する設定が加えられている。本作には労働に絶対的価値を見出す近代の労働観が色濃く反映されているのではないか。それは現代に生きる私たちにつながる労働観・生命観でもある。

近代人によって習慣化され再生産されてきたこうした労働観と生命観を批判的に問い直すことはできないだろうか。「弟」は病苦に耐えかねて自殺を図ったのではない。働けないがゆえに存在価値を喪失し、兄の生活にとって障害以外の何者でもないと自己規定してしまったのだ。しかし、喜助の語りを注意深く読めば、「弟」には喜助との紐帯があったばかりか、様子を見に来てくれる隣家の老婆もいた。この隣人は流血の現場を見た際に、「弟」の側にいた喜助こそが加害者であると即断しており、「弟」が自殺を計ったとは考えていない。こうした箇所に着目すれば、老婆から見ても「弟」は自殺するような様子もなく、日々の病床生活を静かに営んでいたことが読み取れる。

喜助と「弟」が二人で暮らし続ける道はなかったのか――たとえ病がその命を奪うまでの限られた時間であっても。三好は「足手まといの人間を抱えて生きてきた過去の辛酸」や「足手まといを抱えることがそのまま、共倒れの危機に直面するような貧苦の実感」という、本文にはない情報を想像的に読み取っている。[34] しかし、原典に様々な設定が加えられたにも拘わらず、「高瀬舟」には「辛酸」や「貧苦」について具体的事項を追記・拡大した痕跡は窺いがたいのだ。原典では「渇々粥を啜りて」「其日を過し兼ね貧困に迫りて自害をしかゝり」とあるが、小説ではむしろ幼少期の兄弟に「町内の人達がお恵下さ」ったことや、つい半年前までも「留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるやうに、わたくしの頼んで置いた近所の婆あさん」が兄と「弟」の生活を支えていたことが、新たに設定されているのである。

喜助は何とか生計を支え、老婆も彼らの暮らしを助けていた。「弟」の存在は負担で迷惑だっただろうか。だが兄が「弟」を「足手まとい」に感じていた様子は本文から窺えないし、老婆もまた隣人を支えることで社会参加していたことが本文から読み取れる。

貧困と自己犠牲（相互献身）が、「毫光」の差すような神々しい人物を生み出すという物語理解も魅力的かもしれない。しかし、ごく狭い血縁・地縁の中でも治療や延命が計られていた日々の営みに、私たちはもっと意義を見出してもよいのではないか。

六　ままならない身体

病で働けなくなった者が、家族に迷惑をかけないよう献身的に自死を選ぶ。その基底に横たわるのは、労働力という生産性を保てない者は生きる資格がないという暗黙の了解である。働かざる者食うべからず。自分の生活資金を得るだけの労働力を持たず、そのことによって家族の生活を脅かす者は、自ら進んで犠牲になるのが

道徳的行為である――「高瀬舟」とその受容史は、こうした労働観および生命観を示唆している。

しかし、一方で「高瀬舟」は生産労働から離脱した働かない身体が、実は最期までメッセージを送り続けるべく、豊かに機能していた様も描いている。そして、働きながら生きているすべての者たちの身体が、いずれ働かなくなる事実を示すばかりか、さらには人間の身体が本来的に統御困難なものであることをも暴露している。具体的に確認していこう。

「高瀬舟」には光と闇の描写が頻出する。月を仰ぐ喜助の目、庄兵衛が幻視する「毫光」、結末の「黒い水の面」。「暮方」にはじまる「朧夜」の物語には、闇に閃く様々な微光が描き込まれている。中でも喜助が語る「弟」の「目の色」は、無言ながら饒舌に語り掛け、喜助の脳裏に様々な解釈を引き起こす。この点については菅聡子が詳述しているように、「こんな時は、不思議なもので、目が物を言います」と語る喜助は、瀕死で口が働かなくなった「弟」の眼光を読解することで、その意図を汲み出してやまない。[35] また、菅は言及していないが、「弟」が絶命したあとも喜助は「目を半分あいたまま死んでいる弟の顔を見詰めていた」と語っている。死後も人間の身体（眼）はそこに存在するだけで意味を発することが記されているのである。

また、人間の身体が本来的に不随意性を含んでいることも「高瀬舟」は描き出す。「弟」は「笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた」と述べていたという。死のうとしても死ねないほどにままならないのが人間の身体である。喜助もまた「わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜かう、真直に抜かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手応は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました」と語っている。積極的安楽死に手を貸すこと、あるいは自殺幇助もままならない。

身体は思う通りには機能しないものである。それは不治の病を患った者だけに訪れる現象であろうか。「高瀬舟」はそうでないことを教えてくれる。喜助の無慾に接した庄兵衛が自省する箇所で、次のような内的語りがある。「しかし心の奥には、かうして暮していて、ふいとお役が御免になつたらどうしやう、大病にでもなつたらどうしやうと云う疑懼が潜んでいて」、と。今は健康で同心として働く庄兵衛もまた、喜助の「弟」のように病を患って働けなくなる予感におびえているのである。

一方の喜助は、「それにわたくしはこんなにかよわい体ではございますが、ついぞ病気をいたしたことはございませんから」と語る。だが流刑地で健康に働いていける保証などどこにもない。[36] むしろ「どうせなほりさうにもない病気だから」と言いながら、日々兄と隣人によって薬が届けられていた「弟」が、病とともに生き続ける可能性もあったのだ。そしていずれにしても、やがては喜助も「弟」も庄兵衛も、誰もが年老いて心身により大きな困難を背負うようになっていく。

人は誰しも働かない身体の可能性に開かれている。そうなっても自死せずに済む福祉社会を整備するだけではなく、そのような「道徳」「習慣」を身につけなければ、すべての人間は常にままならない身体を恥じ、自死に迫られる不安や恐怖に怯えなければならないのではないか。[37]

七　近代思想としての生／労働

ところで、「働かざる者食うべからず」という言葉に集約される労働観は、近代以前から存在したとも推察される。働かなくなった身体を排斥する物語の源流として、棄老説話が想起されるかもしれない。高齢者を山に棄て、死に至らせる話である。「高瀬舟」を、近接する物語形態を持つ前近代的なテクストとしての棄老説話と比較し、さらにその特徴を探りたい。

『大和物語』を嚆矢とする姨捨伝説が少しずつ細部を変えながら何種類も流布されていることは、井上靖「姥捨」[38]でも指摘されている。ただし、姨捨伝説において生産労働から脱落したことを理由に老人を棄てるという設定は、実は一般的ではない。『大和物語』ではある男の妻が姑を憎んで山に棄てようとするが、憎悪する理由は姑が年老いて腰が曲がっているからというものである。[39] 井上靖が紹介する絵本でも、具体的理由は特に明示されないまま「老人嫌い」になっている国主が、七十歳になった老人を山に棄てさせるという話になっており、労働生産に関わる言及は

ない。また、いずれも棄てられるのは年老いた女性であり、彼女を山奥に棄てようとした息子は途中で改心して引き返したり、一旦は棄てるものの戻って連れ帰ったりする。さらに、隣国から突きつけられた難題を、連れ帰った老人の智恵を借りて解決し、そのことが国主に翻意をもたらして、棄老の掟を廃するに至るのである。

つまり、老いて働かない身体を廃棄するというよりは、むしろ長年培われた智恵という価値を見出し、「オオトリテエ」たる国主の法をも変革してしまうのが、姨捨伝説なのである。

鷗外がこうした棄老説話を知らないはずはない。「高瀬舟」に描かれ、特に問題化されないまま読み飛ばされてきた、働かない身体が自らを抹殺する行為は、今村が指摘したように[40]、やはり近代に特有な問題のひとつではないか。

おわりに――いのちの教育・対話型論証モデル

「高瀬舟」の語りは読者を安楽死の容認へ誘う。そして安楽死の手前にある自殺の根本動機とされた「働かない身体」の問題を見えにくくする。誰かを生かすために誰かが死なねばならないような特殊な状況を想定して安楽死の是非を論じ、犠牲や献身といった道徳的な評価を与えるのは、あまりに一方的な処置であろう。実は「高瀬舟」には、働かない身体を本来的に有する人間がただ生きていくことの意義を考える観点も描かれていたのだから。

本稿の主眼は授業実践への提案ではないが、特に六節で注目した本文を事実・データとして新たな対立意見や新たな問題を教室に導入することで、対話型論証モデルに基づく授業を展開することもできるだろう。対話型論証モデルとは、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」を、松下佳代がモデル化したものであり、一九九〇年代から教育に求められてきた「問題解決」「論理的思考」「批判的思考」「コミュニケーション」といった活動を一まとめにした概念である[41]。本稿はいわば本文や先行研究と対話しながら、従来主張されてきた主題とは異なる対立意見として「生の尊厳」を見出した。そしてこれを新たな「問題」として定置したときに、本文のどういった箇所が事実・データとして挙げられ、論拠となるかを検討した。こうした基礎作業を経た今、「喜助の弟は本当に死ぬしかなかったのか」「病気で働けないことは迷惑で悪いことか」といった問題を教室に導入し、これまで注目されてこなかった本文箇所をも論拠としながら対話することも可能となるはずである。

大谷いづみは「高瀬舟」に触れ、学校教育の現場で安楽死が「尊厳死」として肯定的・積極的に語られることの危険性を早くに指摘していた[42]。猛烈な苦痛に耐え続けることと、自死による苦痛からの解放を天秤にかけ、後者の選択に共感する意見は教室でもしばしば聞かれる。喜助の弟の死を自己犠牲として意味づけることは、こうした傾向を補強する。働かない身体を罪と捉えると、自己犠牲を賛美するとともに、死によって苦痛から自由になる権利や、延いては殺す権利をもなし崩しに認めることにならないか。それは人がただ生きることの否定である。

教室で自殺の問題を安易に取り上げることは厳に慎まなければならない。だが自殺は重大な現実問題であり、自殺を描いた文学教材を通して自己の生命観・身体観・倫理観を形成する学びは極めて重要であると考える。だからこそ、「弟」の自殺動機を自然なものとして看過してはならないし、安楽死を積極的に評価する一方的な授業であってはならないことは言うまでもない。「弟」の生や置かれた環境を知識としてテクストから読み取り、安楽死容認に対する疑問として運用することも可能なはずである。

なお、すでに述べたとおり、「高瀬舟」に描かれているのは、一般的に「安楽死」と呼ばれる事例とは大きく異なっている。ゆえに、「高瀬舟」をめぐって、安楽死の是非や、積極的安楽死と消極的安楽死の差異や、安楽死による患者本人のクオリティ・オブ・ライフの尊重を議論することは妥当ではないと考える。

「高瀬舟」は人が自殺によって他者を生かすという生き様／死に様を描いたテクストだが、一方で本稿が明らかにしたように、人が自ら死ななければならないと考えるに至る理由を、批判的に問い直すテクストとしても受容できるはずである。

附記　森鷗外「高瀬舟」の引用はすべて初出に拠った。ただし、踊り字や旧字など一部表記を変更した。本稿は二〇一九年六月一日に全国大学国語教育学会第一三六回茨城大会で

行った研究発表を基にしている。司会を務めて下さった藤森裕治氏、望月善次氏をはじめ、会場の内外で質問・助言くださった方々に感謝申し上げます。

注

（1）橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』（渓水社、二〇〇二年七月、三四九頁）を参照。橋本によると旧制中等学校時代の「高瀬舟」の採録は女学校読本に多く、その理由は「『足る』ことを知る」に中心をおいて教材化されたものと考えられる」（同書三四四頁）とされる。

（2）中学校では『中学校国語3年生』（光村図書、二〇二一年）に巻末資料として、高等学校教科書では『現代文A改訂版』（大修館書店、二〇一九年）に採録されている。

（3）角谷有一「プロットの読みを深める」（『文学の力×教材の力　中学校編3年』教育出版、二〇〇一年六月、一四八―一六五頁）

（4）三好行雄「「高瀬舟」について――その成立」（『國文学　解釈と鑑賞』第十九巻第七号、一九五四年七月）

（5）森鷗外による「高瀬舟」の解題は、『心の花』（第二〇巻第一号、一九一六年一月）に「高瀬舟と寒山拾得――近業解題」として掲載されたのち、短編集『高瀬舟』（春陽堂、一九一八年）に再録されており、その際に「高瀬舟」と「寒山拾得」それぞれの言及部分に分けられ、「高瀬舟」に関する部分は「附高瀬舟縁起」と解題された。また、鷗外が参照した「流人の話」については前田愛「「高瀬舟」の原拠――森鷗外と古典」（『國文学』第三十二巻二号、一九六七年二月、十七―十九頁）が詳述した。原拠本文は、『校訂翁草』第十二巻（神澤貞幹編・池邊義象校訂、巻百十七「雑話」、五車楼書店、一九〇五年六月、五七―五八頁）に収録されているほか、『日本随筆大成』（第三期第二二巻、日本随筆大成編輯部編、吉川弘文館、一九三一年）でも読むことができる。

（6）「ユウタナジイ」は鷗外が「縁起」で用いた語句であり、「高瀬舟」の本文には登場しない。

（7）三好行雄「「高瀬舟」」（『別冊國文学　森鷗外必携』一九八九年一〇月）

（8）注7に同じ。

（9）ナラトロジー（物語論）を用いた「高瀬舟」の分析については、友田義行「知足と安楽死を超えて」と水川敬章「謎と反復をめぐるテクストの仕組み」（松本和也編『テクスト分析入門　小説を分析的に読むための実践ガイド』ひつじ書房、二〇一六年一〇月、三〇―四六・四七―五九頁）を参照。

（10）竹内常一『読むことの教育――高瀬舟、少年の日の思い出』山吹書店、二〇〇五年三月、五一頁）

（11）常田寛代表「高瀬舟　教材の研究」（『中学校国語　学習指導書3上』光村図書出版、二〇一六年二月、二五三頁）

（12）注10に同じ。

（13）注4に同じ。

（14）守随憲治編『国語二　高等学校用』（教育図書、一九五五年）

（15）注4に同じ。

（16）兄弟が居住地を転々とするという設定は、原典の表題にある「流人」に「漂泊」の意味を重ねたものか。

（17）兄弟が空引機という織物業に従事していた点は、原典から小説へ省略することなく引き継がれた。森鷗外がテクスト（織物）という概念を知っていたはずはないが、先行テクストから新たな創作を生み出す手法が自己言及されているとも捉えられる。

（18）注4に同じ。なお、森鷗外の安楽死への関心について本人や家族が記した文書として、森鷗外「甘瞑の説」（『公衆医事』第二巻第五号、一八九八年）、森鷗外「金比羅」（『スバル』第一〇号、一九〇九年）、森於菟『屍室断想』（時潮社、一九三五年）、小堀杏奴『晩年の父』（岩波書店、一九八一年）、森茉莉『父の帽子』（講談社、一九九一年）などが挙げられる。

（19）竹盛天雄『現代日本文学講座　小説3』（三省堂、一九六三年）

（20）田中実「『高瀬舟』私考（読む）」（『日本文学』二八巻四号、一九七九年四月、七五―八二頁）

（21）木村小夜「船上と白州――「高瀬舟」試論」（『福井県立大学論集』八号、一九九六年、一二七―一三八頁）

（22）寿台順誠「「諦め」としての安楽死―森鷗外の安楽死観」（『生命倫理』二六巻一号、二〇一六年九月、一五―二五頁）

（23）注21に同じ。

（24）注21に同じ。

（25）三好行雄が提議した課題について、早くには田中実が、「喜助は一旦弟の〈肉体の死〉とともに〈精神の死〉を迎え、かつての日常的現実を超えた〈新たな精神〉に」出会い、「それが結果として知足の喜びを齎した」という宗教的概念による統一的見解を試みた（注20に同じ）。また、寿台順誠は「知足＝財産に対する諦め」、「安楽死＝生に対する諦め」とし、「諦念」を軸にして二つの主題を統一的に解釈できるとしている（注22に同じ）。

（26）貧困が先か、病気が先かという議論もあるだろうが、困窮しながらも続いていた兄弟の生活が、弟の罹患に起因して途絶した経緯を重視したい。

（27）鷲田小彌太は『働かない身体　新福祉倫理学講義』（渓流社、二〇〇五年三月）で、社会主義によって出現した中央統制型の強制労働国家が生み出した、生産効率性の低い慢性サボタージュの世界、働くことに誇りと情熱を持つことのできない勤労者社会を、「働かない身体の社会」と呼んで問題化した。本稿では、病による身体機能不全と、そ

れに伴う生産労働への不参加状態を表す語句として、「働かない身体」を用いる。

（28）丹羽光威「鑑賞」（『高等学校　新現代文　指導資料』大修館書店、一九九〇年四月、六一二―六一九頁）

（29）戸坂潤『思想と風俗』（三笠書房、一九三六年）。引用は平凡社復刊（二〇〇一年十一月）より。

（30）高野美保「〈例外〉の物語――森鷗外「高瀬舟」論」（『立教大学日本学研究所年報』十三号、二〇一五年八月、六九―七八頁）

（31）注20および注21に同じ。

（32）注10に同じ。

（33）今村仁司『近代の労働観』（岩波書店、一九九八年一〇月、五八頁）

（34）注７に同じ。

（35）菅聡子「森鷗外『高瀬舟』を〈読むこと〉」（前掲『文学の力×教材の力　中学校編３年』、一三四―一四七頁）

（36）杉本完治『森鷗外　永遠の問いかけ』（新典社、二〇一二年九月、一一三―一一七頁）によると、喜助のような資力に乏しい者の流刑地における生活はかなり厳しいものであった。江戸期を通じての八丈島における統計数字からも、自殺者を含む多くの死者が出ており約半数が未帰還であったことが分かるという。

（37）「ままならない身体」という概念は西成彦が提出した。立命館大学生存学研究センター編『生存学』第四号（生活書院、二〇一一年五月）の特集「文学のなかの〈ままならない身体〉」および西成彦『ターミナルライフ　終末期の風景』（作品社、二〇一一年九月）を参照。

（38）『文藝春秋』（第三三巻第一号、一九五五年一月）

（39）森本茂『大和物語全釈』（大学堂書店、一九九三年、四四二―四四七頁）

（40）注33に同じ。

（41）松下佳代『対話型論証による学びのデザイン　学校で身につけてほしいたった一つのこと』（勁草書房、二〇二一年二月）

（42）大谷いづみ「「いのちの教育」に隠されてしまうこと――「尊厳死」言説をめぐって」（松原洋子・小泉義之編『生命の臨界』人文書院、二〇〇五年二月、九一―一二七頁）